

王子グループは1873年の創業から、事業領域を拡大し、成長を続けています。時代の動きを敏感に受けとめながら、その時々で求められる社会ニーズに正面から向き合い、事業構造を変化させてきました。近年は、持続可能な社会への貢献を目指し、国内事業で培った技術を積極的にグローバル展開しています。

1873年

王子グループの起源は、近代日本経済の祖・渋沢栄一による抄紙会社設立にまで遡ります。



渋沢史料館所蔵

渋沢は「製紙事業及び印刷事業は文明の源泉」と喝破。紙を国産で供給するという高い志を貫きました。

近代洋紙産業の誕生

1910年

紙づくりに必要な森林や水などの豊かな資源と、広大で平坦な土地を併せ持つ北海道の漁村に、苫小牧工場を開場し、新聞用紙の生産を開始しました。



未開の支笏湖畔・ナッソウの滝に最新の水力発電所を建設するなど、想像を絶する難工事に挑みました。

国内自給体制の確立

1950年代

高品質な紙を迅速かつ大量に製造しようと、当時、全く実績のなかった「連続蒸解釜」の生産性の高さに着目し、春日井工場への導入を決定しました。



新聞用紙の苫小牧と上質紙の春日井の両輪で成長。春日井は都市型工場の先駆けにもなりました。

新たな技術への挑戦

1970年代

紙需要は増加の一途を辿ると共に、紙に対する期待が高まり、新聞用紙や印刷用紙以外の広がりを見せていきます。



白板紙や感熱紙、家庭紙など、生活を支える様々な場面で「紙素材」が活躍するようになりました。

生活変化と紙の多様化

1990年代

省資源や省エネ、都市ゴミへの対応など、人々の生活に直結する課題に注目が集まります。



新聞用紙の軽量化が定着し、家庭紙ではティッシュカーターのコンパクト化を実現。また、「古紙利用技術」の進歩により、古紙利用率は50%を超えました。

環境問題への対応

2000年代

2008年以降、紙の生産量は減少。この未曾有の危機は事業構造の転換への契機を生み出します。



梱包・包装資材としての板紙需要は堅調。紙との生産比率が徐々に変化します。

事業構造の転換

2010年代

東南アジアを中心とした海外展開を積極的に推進。海外売上高比率は約30%に到達しました。



現地の旺盛な需要を支えるため、マレーシア、カンボジア、インドなどに段ボールや紙器工場を新設しています。

グローバル展開の拡大

